

# Triumph onedollar ～勝利へ の放浪者～

リューヤ

「・・・ちょっとこの辺で休憩でも挟みますか」

語り部は手にしていた本にしおりを挟んでから閉じると、こちらを向いてそういった。あれから確かに随分な時間が過ぎている、一息入れるのも悪くないので語り部の意向に賛同することとした。

語り部は本を膝の上に置くと軽く首を回しながらストレッチを始めた。椅子の上に座りっぱなしだったので尻が少し痛くなってきたので自分も一度立ち上がり、腰をそらして大きく伸び上がった。することが見つからなかったからこの男の語る物語に耳を傾けて、もうどのくらいの時間がたったのか知れないが、いい加減疲れてきた。

ここがどこなのか未だにハッキリしないまま時間ばかり経過し・・・それどころかここにいる間中自分の体内時計も狂ってしまい時間間隔も曜日感覚も薄れてしまった。

・・・グゥ。

ちょっと考え事をした途端、急に腹がすいてきた。考えてみればこの暗い空間に着て以降、何も口にしていなかったのだ。食事すら忘れてしまうくらい語り部の話にのめり込んでしまった自分が恨めしい限りだ。

そんなこっちの事情も知らずに、語り部はこちらの様子を窺いながらクスクスと笑っている。徐に右手の指を軽く弾くと、また新たな空間に光が差し込んできた。照らし出された場所にあるのは、サンドイッチに果物、そしてお茶やコーヒーなど簡単につまめる軽食だった。

前言撤回、どうもこちらの腹の音が完全に聞こえていて語り部はそれなりに気を使ってくれたようだ。

「私もちょっと疲れたので、少しつまみながら続けましょうか。そうだ、ついでにいいものがあります」

そう言うと今度は何やら懐から何かを取り出した。それは今じゃすっかりその姿もめったにお目にかかれないMDのディスクのようだが、何に使うつもりだろうか？不思議に思いつつもサンドイッチに手を伸ばし一口頬張ってみる。あ、卵サンドだ。

「ちょっと手に入れるのに苦労した代物でしてね、これはちょっとした魔法のMDなんですよ」

少し冗談っぽくいつて見せるが、そのお得意の心無い笑顔ではお茶目な仕草も全く面白

くなかった。

語り部はまたパチンツと指を弾くと、例によってまた新たな光が落ちてきてそこにあるものを照らしてくれた。

そこにはまた古めかしくも懐かしいラジカセがテーブルの上にチョンと置かれていた。ここにきて語り部が初めて立ち上がると、MDをラジカセの中に収納して再生ボタンを押した。

．．．．．んん、やっぱり音楽が聞こえてきた。

「あなたにはこの曲が何に聞こえますか？実はこの音楽、私の聞こえている音楽とあなたが聞いている音楽とは違う音が聞こえています。それこそが『ちょっとした魔法』の正体、これからはこのMDをかけたままお話を続けましょう。場面場面に応じて適材適所と感じるBGMを決めるのは．．．あなたです」

よく分からないが、要するにこれから先の話はただ黙って聞いているより自分なりに合致すると思うBGMも聞きながら物語が進行するってことか．．．。

今どき公園で飴ちゃん舐めながらポーッと眺めているだけの紙芝居とは違うわけだし、それもまた一興。

バナナサンドまいうー。

「・・・・・・・・ん？」

目が覚めるとなんだか体がやけに重い気がした。体中に痛みがある、喉も乾いている、唇が乾燥しきりカサカサしてむず痒い。瞼をこすって自分の意識を強引に回復させると、ようやくジンは目を覚ますことができた。

まず目に入ったのは、灰色の天井と回っている空調のファン・・・・・・・・ごくありふれた寝起きの光景だが、この景色にジンは見覚えがなかった。

上半身を起こして周囲を確認すると、今自分がいる場所は狭い個室の中であることと自分がベッドの上で寝ていたことがようやく理解できた。

不意に左腕に痛みが起こり確認すれば、いつの間にか腕には点滴の針が刺さり包帯も巻かれている。腕だけではなく頭にも体にも、あちこちに包帯と湿布が張り付けられ傷を治そうとしてくれている。

しかし全く記憶がない・・・・・・・・ここ数日間の記憶がまるで道に落としてしまったように何も思い出せない。何があって今こんな状況になっているのかも全く理解できない。

いい加減痛いだけだった点滴の針を引き抜くと、包帯も解いて枕元に置いてあったメガネをかけ、ベッドから降り右隣の窓を閉め切っているカーテンをバツと開いた。いきなり差し込んだ強い日の光に一瞬目がくらんだが、徐々に目を開いて外の景色を確認すると、ジンはまた違う意味で目がくらみそうになった。

眼下に広がる景色は、いわゆる絶景と呼ぶにふさわしい壮大な景色だった。一体ここは地上から何十m・・・・・・・・いやさ何百m上空にあるのだろうか？建物すべてがまるで豆粒のように小さく見え行きか合う人々はまるでゴマ粒のようだ。

どうも大きな町らしいが、町の向こう側に広がる広大な砂漠以外にその向こうの岩石地帯までよく見える。自分が今まるで雲の上に乗って雲と同じ目線で世界を臨んでいるような、そんな奇妙な感覚がジンの中で満たされた。

・・・・・・・・っと、いつまでもそんなことを考えている場合ではない。ここがどこなのか早いところ把握するのが先決である。ベッドを挟んだ反対側の壁際にはジンのコートがわざわざハンガーに掛けられ壁のフックにぶら下がり、その下にはブーツと愛刀2本が立てかけられている。一番の貴重品がこの場にあるところを見ると盗みの類が目的ではないようだが・・・・・・・・。

急いで身支度を整えてベルトを巻き終わると、ここでようやく他の連中のことを思い出した。どこに居るのか探し出そうと思いドアノブに手をかけるまでは良かったが、肝心のノブがこれまた頑固で左右どちらに回してもジンをこの部屋から出してくれない様に開いてくれなかった。

別にここがどこだろうが構いはしないが、自分を監禁しようなんて企む連中にジンは遠慮などしない。さっそく片方の剣の柄を掴みこのドアを文字通り切り開こうとした時、ガチャガチャと外側から部屋の鍵を開けようとする音が聞こえた。

ジンは反射的に警戒し、ドアから半歩離れ身を低く構えると、この扉の向こうにいる野郎がこの部屋に入ってくるのをジッと伺った。

扉が開いた瞬間、壁と扉から生まれたわずかな隙間へ抜身の剣を突き刺しこの扉を開けた野郎へさっそく牽制を行った。シャキンッ！と涼しい音と共に、扉は開けた人間の手から離れ勝手に動きながら完全に開き切った。

扉の向こうから現れたのは、見たことのある軍服を身にまとった大柄な男だった。濃い土色で上下統一された制服と小洒落た軍帽、この服装だけでジンはこの男が軍人だと理解できた。

当の本人は突然ドアの隙間からこんな刃物が飛び出してきたにもかかわらず、驚いてその場で尻餅を突くどころか、表情も崩さず悲鳴の一声も上げず、ジッと立ち尽くしたまま視線だけをジンの方へ向けている。相当肝っ玉が座っているのだけは分かったが、まだこの剣を下げる理由はないのでジンはそのまま刃を相手の喉元まで添えた状態でギロリと睨み返した。

「・・・・お目覚めのようで、気分はいかがですか？」

「ここはどこだ、テメエは誰だ、オレの連れ共はどこだ、何が目的だ？」

相手の一言は完全に無視し尽くし、自分の都合だけを相手に向かって放り投げた。ジンからして見ればこの男は下手をすれば命の恩人なのかもしれないがそんなこと今は関係ない。自分の保身が何より第一優先なのはどこの誰でも当たり前なのだからな。

「・・・・場所はあとでゆっくりお話ししましょう、某の身分もその時に、あなたの仲間は皆無事に目を覚まし今は別室に手待機しています、目的は後程」

「・・・・」

男の口調は聞いていて気味が悪いくらい機械的な話口だった。まるで感情がないかのような、しゃべることのできる人形かロボットのような野郎だった。順を追って質問を返してくれた礼として、ジンも突きつけた剣を鞘に収めた。

口が寂しくなっていることを思い出しタバコを吸おうとポケットをまさぐるが、妙なことにズボンにもコートのポケットにも、タバコどころかライターすら見当たらなかった。財布はあるのになぜタバコだけが無いのか不思議に思っていると、男が自分のポケットの中からジンの愛用するタバコとライターを取出し放り返した。

「申し訳ない、勝手ながら火器類のみ没収させてもらった」

男はまるでその気の無い喋り方で陳謝すると、こっちへ来いと促し部屋から出て行った。さすがに舌打ちをしてしまったが、返してもらったタバコに火をつけながらジンは男の後を追いかけた。

あの男の軍服には見覚えがあるといったが、それはドクターに教えられたことと今まで何度となく繰り返して見てきたから覚えているのだ。

この男の来ている軍服は、「フェイスラー・ツェリザカ軍」の制服で間違いない。なぜこの連中が自分たちを助けたのか皆目見当がつかないが、まずは連中と合流した方はよさそうだ。ドクターや虎眼ならこの状況をうまく打開してくれるかもしれない。

ほんの少し歩いた先にある部屋の大きな扉の前で、男は立ち止まった。それ以上一切何も言わず、ただ振り返ってジンをひたすら見下ろしている。要するにここに入れと言っているのが見え見えだった。

ジンは煙を吐き出すとさっそくその部屋の中に入った。扉一枚くぐった先に用意されていた部屋は応接室のような場所だった。赤い絨毯が敷き詰められた部屋の中にいくつかの大きなソファと大きなテーブル、テーブルにはもてなし用に準備したのであろう菓子類や果物、そしてお茶の入ったポットまで常備されていた。その部屋の真ん中で一行はまったりくつろいでいる最中であつた。皆一様にジンと同じような手当てを受けた痕跡がある。

「お、ジン起きたさ？おっはー」

「君が一番ビリだったよ、キシキシ」

「ビリだとかなんだとかは別にいいだろ？ってか何なんだここは？」

「知らね・・・アタシらも気が付いたらここに通されて、お前が目え覚ますの待ってた」

フウンとだけ呟くと、ソファの背もたれの上に腰かけて煙を吐き出した。ここから見える窓の外の景色もまた絶景だ。地元の山を登ったところでこんな景色を拝むことなどできなかったらうなと少し思い出にふけた後、とっとと現状のまとめに入るためドクターと話を始めた。

「なあドクター、ここってよう・・・」

「みなまで言うなメガネ君、小生のここまでの推測を皆にも話しておこうじゃないか」

「ん、推測？」

「うむ・・・。まず小生達をここまで運んできた連中の正体だが、もうほとんど分かっている通りフェイスラー・ツェリザカの連中で間違いないだろう。そしてこの場所・・・」

ドクターはソファーから立ち上がると、クッキーを片手でつまみながらゆっくり窓まで近づいた。

接近したガラスに自分の姿が薄っすら反射し、普段は見えない前髪の奥の瞳がチラリと見えた。それから後ろ手に両手を組んだまま振り返ると、その推測とやらを発表した。

「この景色と制服を着た人間の数、その他もろもろのパーツを自然な形で組み合わせていると一つの絵が完成した。ここはあのフェイスファース・ツェリザカ軍の本拠地、総本山とも呼ばれるシーバルー最大の都、「アーウェン」とみて間違いないだろう」

そのドクターの発表を終えたとたん、場の空気が凍りついた。

フェイファー・ツェリザカ軍、このシーバルー大陸内において全体の50%の領土を所有する国内最大規模の軍事機関。ここ近年においてさらに力をつけた新参者のくせに圧倒的な軍事力、武力、科学力を駆使し近隣の軍事組織をまるで食事のように食い荒らし、体内に吸収してさらに拡大を続ける現時点におけるナンバー1の軍隊。

正直な話、この巨大な力を手に入れるのには相当腹黒いことも噂になっている。下手に逆らおうものなら即刻ド頭ブチ抜かれてドラゴンの餌にされてしまうなんてことは子供でも知っている。だから誰もこいつらに逆らうことができない。冷酷だとか残虐だとか、外道とか非道とかそんな例えで追いつくのかすらも危うい存在なのだ。

そんな連中がジン達を拾い、怪我を治療してくれた以外になぜここまで手厚く歓迎してくれるのかがまだ謎のまま。こんなことをして一体何の利点があるのか、同時に何を企んでいるのか？

「キシシ、そこに関しては小生の推測も追いつかない。何を考えているのかは今だ皆目見当もついていないよ」

「ふーん、でも一応オレっち達を助けてくれたんだから根っからの悪者ってわけじゃないと思うさ」

「そこなんだけどよう・・・そもそもいったいなんでオレ達こんな怪我してるんだ？」

ジンがそんな疑問を持ちかけて振り返ると、場の空気が少し変わった。

キョトンとした顔で見つめるドクター、煎餅をかじったまま固まり冷や汗を流すアゲート、今にも爆発寸前な怒り方をしているジェット、どうも静かだと思っていたら今日を覚まして周囲を見回る猫眼。反応がバラバラなせいでさらに訳が分からなくなり顔をしかめてしまった。

「・・・メガネ君、覚えていないのか？」

「だから何を？」

「ああああああジン！！覚えてないなら無理して思い出さなくてもグボァッサ！！！」

「テメエは黙ってる！！本気で覚えてねえのかジン、3日前の事？」

「・・・3日？」

3日前、ジェットの激怒具合、そして制裁されたアゲート……。これらのキーワードを使って記憶の奥にある閉められた記憶の扉を開こうと思い、目を閉じてジッと思い出し始めた。

...

...

ボンヤリ何か思い出してきたような気がする。

...

...

あ、何かここまで来た、頭のとっぺんあたり。

...

...

.....チーン！思い出した！！

その日オレ達はいつものように襲いかかってきた命いらずの食事・・・

もとい、ドラゴンを交戦していた。砂地の生活環境に特化したサンドドラゴン、それがこの日の飯のおかず・・・

もとい、主食だった。

しかし相手の一筋縄では食われてくれなく、魚のように砂の中を泳ぐように動き回り足元から奇襲を仕掛けるタイプの戦法にととてもかなり苦戦した記憶がある。

虎眼得意の脅しも威嚇も通用せず、ジンなどの接近戦では分が悪く魔術を使えるジェットとドクターが頼みの綱だったが、素早く俊敏な動きに対応しきれず思わず苦虫を噛み潰した様な気分だった。

そんな時にあのバカ・・・

もとい、あの大馬鹿野郎がろくでもない作戦に打って出た。アゲート曰く、ちまちま攻撃をしたところでダメージがないのなら、物凄く速くて大きなダメージを与えられる攻撃を仕掛ければいいと豪語し、車に飛び乗った。

何を始めるのか気にしながらアゲートの立てた作戦通りに虎眼が囷になり、サンドドラゴンをおびき寄せて砂の中から出てきた直後行ったアゲートの行動は・・・

車を使った体当たり攻撃、通称「神風特攻」。誰もが思いつきもしなかった作戦のおかげで、サンドドラゴンを撃退することができた。撃退と言ってもケガを負わせた程度で、サンドドラゴンはこれにビックリして生きたまま逃げてしまったのだ。

当然この作戦により車は炎上、大破。ちゃっかり衝突寸前に車から脱出したアゲートは軽傷で済んでいる。

当然この穴だらけの作戦を決行したアゲートは全員から輦蹙を買い、磔にされ人間サンドバックとして4人の拳でリンチにされたのは今更の話。何せ移動の為の足を完全に失っただけならまだしも、車に積みっぱなしにしていたわずかな食料や水までまとめて失ってしまったのだ。この程度で許してくれて命が残っているのならあり得ないくらいの儲け物である。

それから先の移動は自分の足のみ、傷も疲労も癒えぬままエッチラオッチラと先の見えぬ砂漠を歩きとおし、山のような砂丘をのぼり、太陽の光に炙られて生きたままローストビーフにされてしまうような地獄の環境を水無しで歩いた。

当然、徒歩での砂漠越えの厳しさを知らない一行は間もなくして力尽き、ジェットを皮切りにアゲート、ドクター、ジン、そして虎眼の順でぶっ倒れてしまったのだった。

ここから先の記憶は完全に途切れており、気が付いたらここにいたというわけだ。思い

出したとたん急にあの時の怒りを思い出してきた。アゲートはさっきから震えっぱなしでしきりに土下座をして許しを請おうと必死になっている。ジェットはまだ腹の虫が治まらないのかアゲートの背中をしきりに踏み潰している。

正直人もそうしたい気持ちはあったが、どうにかこうにか今生きているだけで十分儲けた話だと割り切り、これ以上アゲートを責めることをやめた。

だからと言ってアゲートの行いを許したつもりはないと付け加え、せめて最後にと鞘でアゲートの頭をブン殴ってこの話はこれで終わりにした。そういうことなので一応ジェットにも静止を促し、暴力をやめさせた。

「ムユムユ・・・これからどうするネドクター？」

「おや起きたかい猫君？そうさねえ・・・個人的に言えば小生はここに長居したくない。連中の言う事など小生信用してなどいない」

「極めて同感だな・・・とりあえず助けてくれた礼だけ言ってさっさとここからオサラバするか」

「オレっち思ったんだけど、ここでは宝石の情報は仕入れないさ？こんだけデッカイ軍隊なら、何か知ってるかもしれないさ」

「頭を働かせたまえバンダナ君、小生達が探している宝石のことをここの連中の耳に入れてみる？最悪小生達は知っていることを全て吐かせられるまで拷問され、宝石の価値を知られたら最後すべて奴らが独占するに決まっている」

「んん？なんで独占しようとするさ？」

「この大陸には魔術、魔力の概念がほとんどないのは知っているね？奴らからしてみれば魔力とは強大なエネルギー物質、それをうまく利用してやろうと考えないはずがない」

うまく利用された結果、この国の軍事力の均衡は一瞬で崩れ去る。もちろん誰もが望まない形で、だ。

軍隊なんて考えていることは自軍の規模の拡大だけだ。だから隣国と戦争することだって厭わないし、いくら死人が出ようがそれは必要な犠牲だと割り切って遺族に頭一つ下げようなんてしない。

要するに支配欲が強すぎるんだ、この国は。領土拡大の為ならば人も殺すし、有益な情報を引き出すためなら拷問だって手段の一つとしか思っていない。

「ウエ・・・反省しますさ」

「分かればいい・・・」

コンコンコン・・・

部屋の外から誰かが扉を叩いてきた。誰なのかはすでに察しがついている、強いて言えばとうとうお迎えが来たってところだろう。

ジンが扉を開けてやると、入り口の正面にはあのロボットみたいな無表情の男だった。

「お待たせしました、総統の面会準備が整いましたのでお呼びに上がりました」

「総統？誰の事だ？」

「今回あなた方の命を拾ったお方です、直々に話がしたいと申しているのでご案内します」

男はそれ以上何も言わず黙ったまま少しだけ頭を下げると、そのまま向きを変えて廊下を歩きだしてしまった。また黙ってついて来いと言っているようで少しイラっとしたが、今はそんなことをいちいち気にしている場合ではない。気に入らないが一行は男を見失ってしまう前に部屋から駆け出し、男の後ろをついて歩いた。

廊下をしばらく歩いた後、小さい動く部屋の中に連れ込まれて（エレベーターとドクターが教えてくれた）そこからさらに上へ目指して移動した。

チンッと小さな鐘の鳴る音と同時に扉が開くと、やや長い廊下を挟んだ正面に大きな扉が見えた。

この先の部屋に総統はいらっしゃるとだけ言い残し、男は5人をエレベーターから降ろすと一人だけ下へ下がって行ってしまった。無責任にも程がある行為だと無性に腹立たしいが、いい加減今は怒り飽きてきた。もうどうでもいいやと思えるようになってしまい、とりあえずその総統とやらのいる部屋へさっそく入ることにした。

軽くノックだけして返事を待つより早くジंगाドアノブを回して部屋の中に乱入した。

中は広い部屋だった。大量の資料がギッシリと詰まった本棚が左右の壁を独占し、中央には大きなデスク。そしてデスクの背面、入り口の反対側の壁は一面ガラス張りになっておりここから見える景色もさっきまで見ていた景色と違って絶景だった。

デスクに腰かけているのは中年の男性だった。中年とはいっても腐っても軍人、その肉体は鍛え抜かれているようで筋肉で程よく引き締まり、体も大きそうだ。実際の年齢は知らないが彫の深い顔立ちから推測するに50代中頃と言ったところだろうか？  
男はそそくさとデスクの上に散らかっている数枚の書類をまとめると、そのまま乱雑に引き出しの中に仕舞ってからゆっくりと立ち上がった。

「ようこそ皆さん、お元気そうで何よりで。我々の医者達の命を取り留めているのがまるで奇跡のようだと言っていましたぞ」

「あんたか、話に出てきた総統さんってのは？」

「いかにも、私はこのフェイファー・ツェリザカ軍総統、「カール・グスタフ」と申します。よろしくお見知りおきを」

そう言ってグスタフと名乗った男はその場で頭を下げた。めい一杯の笑顔で好印象を植え付けようとしているらしいが、ドクターとジンの目は誤魔化せなかったようだ。あの笑顔は知っている、おべっかばかりで心にも無いことばかり口先に並べて相手の機嫌をうかがうこの世で一番気味の悪い笑顔・・・有り体にいうところの作り笑顔だった。

この顔を見ただけで大体わかった気がする、とっととこんなところから出て行った方がよさそうだ、何か企んでいる可能性がある、と。

「予定ではもう少し早く面会する予定だったんですが、何分忙しい身分なもので」

「世間話に興味はない、小生達に話があるというのはそちらの方だろうか？」

「まあまあそう慌てず、ゆっくりお話でもしましょうじゃありませんか？」

「悪いがこっちも急ぎでな。わざわざオレ達みたいな流れ者の放浪者を助けてくれたことは感謝する。こっちの話はこれで以上だ、そっちの話を聞かせろや？そんで立ち話で十分だ」

相手への礼儀も減ったくれもない不躰なジンの高慢な態度にはさすがのグスタフもカチンと来たのか、しばらくの間6人の間に沈黙の時間が訪れた。ジンからしてみればこんなところにいるのはまさしく時間の無駄なのでさっさと帰りたい気持ちでいっぱいな

のだ。悪びれる様子など欠片もない。

それから時間をおいて、ようやくグスタフは再び椅子の上に腰かけた。

「・・・・・・・・いいでしょう、単刀直入に聞きます。あなたたちはなぜ砂漠で倒れていたのですか？」

「ああそれはオレっちが、ムガゴボッ！！？」

「お前は黙ってるボケ、斬るぞ？」

「失礼した・・・小生達は今世界を旅して回っている一行でね、その道中トラブルで移動の足を失ってあの有様だったただけだ」

「ほうほう旅を・・・何の目的で？」

「それはオレっち達が、痛っ！！」

「黙ってるつつったろ？燃やすぞ？」

「重ねて失礼・・・悪いがそこまで話す義理がない。承知してほしい」

それから先も、グスタフはまるで何かを探るような口ぶりで質問を繰り返した。その度に余計なことを言いそうになるアゲートを取り押さえドクターが重要な部分だけを切り取り、返答内容を深く掘り下げてこようものならうまく内容をボカして曖昧に返事をした。連中が思わず食い付きたくなるような余計な情報を決して流さないように、慎重に。安い餌だと思って海に撒いてみたら鮫や鯨が釣れました、なんてことにでもなったらそっちの処理の方がよっぽど面倒くさそうだから。

質問と応答のキャッチボールはそれから10分ほどで終わってくれた。その頃になるとアゲートの顔面は腫れ上がり人相が変わりかけているのは誰もツッコまなかった。

「・・・なるほど極めてよく分かりました。毎日大変な様子ですね、心中お察ししましょう」

「キシキシ、同情するなら何かくれ？」

「いいでしょう、我が軍の所有する車を一台提供しましょう。それなら文句はないはずだ」

「アタシ等は構わねえが、そんな簡単に車貰っていいのか？」

「構いませんよ、整備されている車なんて我が軍には腐るほど余らせてる。たかが一台提供したところで何にも困りませんよ御嬢さん。子供に小遣いを与えるようなものですよ」

見ず知らずの人間に車一台進呈するのが子供の小遣い程度の損失だなんて、非常に豪気な話である。しかしこっちとしては都合のいい話なのだから素直に例は言った。

「そんじゃあ早速だが急ぎの旅でな、その車ちゃっちゃと用意してくれるか？」

「言うは易し行うは難しと言いましてね、急な話なのでいきなりすぐには・・・何かと補給やら手続きやら準備が必要でね。そうですね、2時間くらい待ってもらえますかな？その間この街の中でも見物しててくださいな」

「・・・わかった」

「ありがとうございます。では2時間後、この建物の入り口にてまた会いましょう」

グスタフはそういうとデスク上の電話を手に取り、受話器に向かって「お帰りだ」と小さくしゃべった。

程無くして入口の扉が開き、またあの鉄仮面野郎が迎えに来やがった。グスタフはその男に町の中を案内させるかと提案したが、それを丁重にお断りし部屋から退散した。

あのグスタフという男、多少下手には出ていたが終始どこか高圧的な態度を見せていた印象的を受けた。これ以上何かされる前にさっさとこの町から退散しようと思い、エレベーターから降りて建物の外へようやく出てきた。

建物の中が快適な温度に空調が調整されていたから外はいつも以上に暑く感じた。

「ケッ・・・気味の悪い男だったな、感じ悪りい」

「オレっちジ〜っと見られた時ものっそい緊張したさ〜」

「ムニユムニユ・・・眠いヨ」

「お前はまだ寝足りないのか？いい加減にしろよ」

「む？猫君、キミその頭どうしたんだい？」

「にあ？」

ドクターに言われて猫眼が寝ぼけ眼をこすりながら自分の頭をまさぐると、綺麗に整えた髪が乱れているのに今更気が付いた。どうも原因は髪を留めていたヘアピンがいつの間にか外れていたらしい。

いつの間にか外れたのか思い出すと、そういえばグスタフの部屋から出ていく際廊下で途中寝ぼけてスっ転んだのを思い出した。きっとあの時外れてしまったのだろう。

そう知れた途端、猫眼は走ってもう一度エレベーターまで戻って行ってしまった。ヘアピンぐらいまた新しいの買えばいいだろうと言ったが、ドクターがくれた大切なピンらしくジンの言葉を完全に無視してエレベーターは再び上へ目指して高速で昇って行ってしまった。

「・・・はあ、面倒くせえ女だなまったく」

「キシシ、恋してくれている彼女の懸命な姿を見るのは気分がいいねえ」

「最っ強に興味ねえ」

チンッ！

ようやくあの部屋の前までエレベーターが到着し、急いで廊下の上につ伏せになって探し回った。可能性があるのはここくらいしかなく、その詮索風景はさながら床の上を這いずり回るゴキブリのそれと酷似していた。

しばらく探し回っていると、扉のすぐ近くのところで件のヘアピンを発見した。念のため装着して確認すると、やっぱり間違いなく自分のものだった。これからは気を付けようと誓いながら戻ろうとした時、

「総統、あの連中如何しますか？」

「むろん捕縛だ、それ以外の命令はない」

扉の向こうでグスタフと部下と思われる男の会話がちょこっと聞こえた。ほんのちょっと興味をそそられ扉をわずかに開けて隙間から中を覗くと、グスタフが部下の男と共にさっき引出しに仕舞っていた書類を広げているのが見えた。

「このデータが本当だとするなら、あのガキどもは今回の実験体にとって非常に都合がよさそうだ。念のためもう一度聞くが、間違いはないのだな？」

「間違いありません、解析したところあの5人の体には鍛え抜かれた強靱な筋肉を持ち合わせ、それに見合った高い運動能力が期待できます。特にこの女二人、片方は桁外れの筋肉量を持ち合わせており計算上ではドラゴンの肉体にも匹敵します。もう片方の女は肉体上は平均的ですが、体内には様々な計器をもってしても解析できなかった謎の高エネルギーを体内に秘めています」

「謎のエネルギーねえ・・・何だとお前は思う？」

「皆目見当も・・・であるからこそ興味が尽きません、一刻も早くあの肉体を解剖し、研究し、正体を暴きたいという気持ちでいっぱいであります」

「んん、他の男3人も我が軍の精鋭部隊に匹敵する力を秘めている可能性がある。分かっているだろうが必ず生かして捕まえろ、何としてもだ」

「了解しました、総統閣下」

一体何の話をしているのかさっぱりわからないが、どうも如何わしいことをしようとする計画について話しているような気がした。ドクターの言っていた通り、ここの連中はどうも性根から腐った野郎ばかりのようだ。研究のために人間を解剖するなんて正気の沙汰ではない。

ひとまず目的は済ませたのだからここからさっさと帰ろうとした直後・・・

## バチバチバチッ！！

猫眼の首筋に突如高圧電流が流された。それはスタンガンによる攻撃である。話の内容に夢中になっていたせいで完全に不意を突かれた猫眼は一瞬で意識が飛び、何が起こったのか理解する間もなく気絶してしまった。

倒れた猫眼の後ろに立っていたのは、例の鉄仮面男だった。男は表情一つ変える事無く足元の猫眼を見下ろしている。

驚くべきことはそのスタンガンの在り処だ、電流は男の右手人差し指と中指の間で今だにバチバチと光を放ちながら唸っている。

音を聞きつけてようやく部屋の中にいた部下が扉を開け、そこでようやく猫眼の存在を確認した。

「何事だ！？」

「申し訳ありません総統、この女がどうやら今話を盗み聞きしていたようなので攻撃しました」

「ちい、余計なことをしやがって。まあいい、貴重な実験材料が一つ手に入ったのだからな」

グスタフが今さっきまで話していた内容の正体は、実はジン達の事であった。ここにジン達を搬送したのも、もともとは人体実験用の素体として活用するために拾っただけであり人命救助活動なんかする気など始めから無かった。

しかしここで5人の体を調べた途端手のひらを返す。5人とも様々な特徴を備えた興味深い肉体を有しており、ただの人体実験よりも今研究を進めているとある新兵器の実験体にしようと目論みだしたのだ。当然そんなことは話してなどいない。

その新兵器はまだ人間を相手に使用したことが無かったのでちょうどよく、うまく成功すればその兵器はこの大陸全土を巻き込んだ最強にして最悪の兵器となりあるはずだとグスタフは確信している。

猫眼をさっそく実験室へ連れて行こうと鉄仮面漢が猫眼の体を持ち上げた時、異変に気が付いてしまった。猫眼はこの場で気絶したことにより虎眼へ姿を変えてしまっていたのだ。

この変化を目の当たりにした3人は驚愕すると同時に、最高の笑顔を浮かべるのであった。

まるで子供が新しいおもちゃを手に入れたように、無邪気で、残酷な笑顔だった。

「・・・・・・・・？」

ドクターはふいに足を止めると、自分が今さっきまで歩いてきた道を振り返った。しかし見えるのは何も変わらないさっき見た街並みと建物、そしてあの天高くそびえる超巨大建造物のみ。あの建物が自分達の世話になった建物でその高さは目測でも700～800mはある。

「どうしたドクター？」

「いや、何か妙な気がしてね・・・・・・・・猫君が遅いなって」

「どうせその辺で寄り道してたら迷子になったんじゃないかね？気にすることねえって」

あの猫眼の性格から考えれば決してありえなくもないジェットの推察だった。果たして本当にそうなのだろうか？と少しだけ疑問に思いつつ向き直って進歩を再開した。

いま4人が歩いているのは、このアーウエンの西半分を占めている住宅地。国内最大の軍事機関が管理しているせいなのかここに暮らしている連中は皆一様に身なりの豪華な人間が多かった。

ジン達には縁遠い富裕層の人間の住まう町に犯罪者はいないらしく、ここに来てから一度スリどころか肩がぶつかっても因縁をつけてくるような悪い野郎は誰もいなかった。その辺を何の目的もなくプラプラ歩いていると小さなドーム状の建物を発見した。そこではいま「世界の武具・防具展」なるものを開催しているようで、興味をそそられて入ろうと思ったが入場料が思ったより高かったのでその場で回れ右した。

その辺で買い食いでもしようかという話の流れになってその辺の露店にも顔を出してみたのだが、この町の物価は随分高いようで田舎育ちのビンボー人には手の出しにくい金額設定に眉をひそめ、ここでも回れ右をした。

そんなことをしている間に気が付いてみればいつの間にかアーウエンの東地区へ足が伸びてしまっていた。この地区のほとんどは住宅地のみ軒を連ねているようだが、さっき見てきた西地区とは打って変わってこちらはなんだか空気がどんよりしている。身なりも随分とみすぼらしく服と呼ぶよりただの布きれみたいだ。

まさに格差社会と呼ぶべきなのだろうか、この違いの差はあまりにも大きすぎる。ここで暮らしている人々も随分とやせ細っているようだし、腕なんかまるで枝のようだった。

建物もやけに・・・・・・・・なんというかシンプルなデザインばかりでただ石を積んで適当に人が住めるくらいの四角いかまくらみたいな家ばかりだ。物珍しそうな目でガキどもが

近寄ってきたかと思えばしきりに「なんかくれ」とせがんでくる始末、仕方なくドクターがトランクの中から飴玉が詰まった袋を渡して帰ってもらった。

貧富の差とは言ったものだが、ここまでピンキリでハッキリしているとかえって爽やかなくらいだ。ムなくしが悪くなるとても悪い意味なのは今さ言うまでもない。

「んん・・・連中はこれを毎日見ておいて何とかするつもりはないのさ？」

「見慣れてるから何もしないんじゃないかね？散歩するたびに道端に落ちてる空き缶ひとつ残らず拾って帰るような野郎はこの世にはいねえよ」

「つうより、まるで区別してるみてえだな、まるで」

「キシキシ、差し詰め贅沢することを許された人間と許されなかった人間ってところかね？」

「そうではない！」

背後から渋みのある老人の声がジン達の会話の間に割って入ってきた。一応足を止めて振り返ってやれば、4人の背後に立っていたのは紛れもなく老人だった。不恰好に生えたまま何の手入れもされていない顎鬚にしわだらけの厳つい顔、着込んでいるのも土や砂にまみれた汚らしい布の服。今の会話を聞いていたのだろうか、老人は何やら4人を見据えながらギンッ！とした瞳でこちらを見ている。

「・・・生憎手持ちのお菓子ならもうないぞ？」

「貴様ら、さっきここに住んでいるのは贅沢できる奴ととできない奴とか言っていたな？」

「キシシ？そうれがどうかしたのかい」

「それは違うとどうしても言いたかったんじゃよ余所者風情の若造どもが」

何が気に食わないのか、さっきから老人の機嫌は悪い様子だ。なんでこんなことを突然言われなきゃならないのか訳が分からないが、ここまで言われた以上ジンも少しカチンとくるのは仕方ない、両手をポケットに突っ込んだ姿勢で老人の前へ言い寄り始めた。はたから見ればチンピラが老人一人に脅しをかけているような光景かもしれないが、初めに因縁をつけてきたのはむしろ老人の方だということを念頭に置いてほしい。

「んだジジィ、田舎者バカにしてっと軽く痛い目にあうぞ・・・最近の若者はキレやすいんだぞ？」

「君はしょっちゅうキレてるだろ、特に身内に対して」

「アハハハハ！それってオレっちのこと？」

「何が気に入らねえのか知らねえけどよ爺さん、アタシら初対面にいきなりそんなセリフな無くねえか？」

「田舎者なら田舎者らしく、とっとこの国から出て行け。それが身のためだ」

「みんな揃ってオレっち無視？泣いていい？」

バカは放っておこう、勝手に泣いてなさい。

「こんなところでフラフラしていたら、終いにゃ貴様ら全員この町の外に出る前に死ぬのと同じ目に合うことなんぞ明明白白だ」

「安心しなジジィ、こちとら身を守る術なんざとっくに習得済みだ。ドラゴンが襲ってこようがアイツらはオレ達の道中の飯だ」

「そんなこと心配した記憶なんぞないわ」

「じゃあ何が言いたいんだい御老人、回りくどい言い回しは性に合わないのだが？」

「ドラゴンよりよっぽどタチの悪い人間に食い殺されるぞと忠告しとるんだバカタレ共が・・・あそこの連中の事だよ」

老人はまだ回りくどい口調で会話と一度止めると、忌々しそうな目つきで視線の方向を変えた。

釣られるように4人もその方向を見ると、正面にはあの天高くそびえる超巨大建造物・・・例の建物がよく見えていた。あまりにデカすぎるせいで建物が影になってしまいこの辺りは少し薄暗かった。

「・・・あれが、どうかしたんかい？」

「あれは確か、フェイファーの本部か何かの建物だろ？」

「いかにもそうだ、あの下品な自己顕示欲の塊の中に居るのは紛れもなくフェイファー腐れ外道共だ」

「ちょっと言い過ぎじゃないさ？オレっち達その腐れ外道集に命拾われた身さよ？」

「・・・ちょっと待て、それは本当か！？」

急に老人の反応と表情が一変した。まるで生まれて初めて本物のツチノコでも見つけたような、言葉では表せないような驚愕感に襲われたような雰囲気だった。

老人は信じられないような様子で量の目玉を剥き出し、アゲートの腕を掴んだ。

「小僧・・・まさか生きてあの建物から出てきたのか？あの悪魔の城から？」

「え？・・・うん」

「どうも不審な様子は見てとれたが、これから小生達は連中のご厚意で車を一台拝借してこの町から出ていく予定だよ、御老人」

「何ともないのか！？体に異常はないのか？記憶にない変な傷があったとか薬を飲まされたりとか？」

「別に・・・てかアタシら、ついさっきまでアイツらに看病されてた身だし」

自分たちは何事もなく無事で圧と話した途端、老人はますます表情を激しくする一方だった。

ツチノコどころかもっと信じられないような、例えるなら神様仏様が古今東西あらゆる物の怪たちとキャンプファイヤーを囲んで酒をジョッキでがぶ飲みし、やぐらの下で百鬼夜行と称して盆踊りでも始めたらきっとこんな顔にもなるかもしれないってくらいの顔だ。むしろこの顔が今は滑稽なくらいに見えてくる。

「それがどうかしたのかよジジィ？」

「・・・気が変わった、ちょっとこっちへ来い」

老人は突然そんなことを言い出すと、ジン達に背を向けて自分についてくるように命令して歩き出してしまった。

いきなり人を罵倒したかと思えば今度はビククリされた上に突然連いて来いだ、なんだか疲れてくる。

至極面倒くさかったが、コッソリ無視して逃げようかと試みたが爺さんにすぐバレてしまいアゲートが真っ先に捕まってしまった。耳を引っ張られ無理やりにでもついてこさせる様子に観念し、一行は仕方なく老人の後ろをついて歩くことになった。

「・・・こちら $\alpha$ 、目標は老人と共に東の住宅地区へと移動。このまま尾行を続けます」

『こちら $\gamma$ 。了解、任務続行せよ。抵抗した場合各自の判断に任せるが・・・間違っても殺すなよ』

「対象以外の人物は？」

『知ったことではない、弾2発までなら許す』

「了解、任務を続行します、オーバー」

一人の兵隊は物陰でトランシーバーを切り、もう一度対象を確認した。

・・・どうも連中はこちらの存在にはまだ気が付いていないようだ。

兵隊はトランシーバーをポケットにしまうと、何も言わず手の動きだけで周辺に隠れている仲間に指示を出した。連中は速やかにその指示に従い、コッソリジン達の後をつけ始めるのだった。

今回の任務の確認、

「ジン・K・ジェイド、以下3名の尾行及び観察。並びに時間を稼いだのち捕獲」これが今彼らに課せられている任務だ。総統閣下直々の命令でもあるので、普段入れている気合いとはまるで違う気構えでかかり、「極力無傷」の形で連中を拘束するのが最大条件だ。しかし現状に応じ、反撃された場合はこちら側で対処するようにも言われている。

曰く、「腕一本までなら許す」とのことだ。

続く

Bパートへ